

歌人足利尊氏について

Study on Ashikaga Takauji, a Tanka Poet.

中 田 伸 一
NAKADA SHINICHI

一 はじめに

足利尊氏(1305-1358)は歌人であるが、まずは「武」によって表舞台に現れた。さまざまな社会的矛盾によって倒幕の気運が高まっていた鎌倉時代の末期、北条氏に次ぐ実力者であった足利氏の嫡男尊氏には隠然たる期待が集まった。元弘三年(1333)三月、北条高時の命令により反幕府勢力の討伐に向かった尊氏は、丹波国篠山において後醍醐天皇(1288-1339)方に呼応して反旗を翻し、六波羅探題を攻略して倒幕を先導した。その功績により公卿となり、天皇の諱尊治の一字を与えられて高氏を尊氏と改名して、建武新政権のなかで優遇された。しかし、新政権は社会の安定を図れずに混迷した。尊氏は武家政治の再興を決意して戦い、幾度か死の瀬戸際から生還し、優れた統率力と巧みな経営戦略により、征夷大將軍に任命されて室町幕府を樹立した。その具体的な歩みのなかに、古今東西の成功した政治家の有するような、成功のセオリーの帰納が可能である。しかしながら、武家政治の再興者は必然的に公家の秩序と権益の侵害者であるから、彼に対する毀誉褒貶がつきまとうのも確かである。

尊氏は武將として時代をリードする一方、信仰心が篤く、和歌や連歌を愛好する文化人であった。和歌は二十代初めに勅撰集に入集して注目された。長じては二条為世(1250-1338)、二条為定(1293-1360)あるいは冷泉為秀(?-1372)らに親炙し、頼阿(1289-1372)、浄弁(1256?-?)等の二条派の歌人と交わった。また、配下の武家にもすぐれた歌人がいた。土岐頼貞、その子頼遠、赤松則祐、小串範秀、高師直、今川範国、その子貞世(了俊)らである。範国を別にすると、いずれも勅撰集に入集している。臨済宗の無念疎石(1275-1351)には、弟の直義(1306-1352)と共に帰依した。疎石の勧めにより後醍醐天皇の菩提を弔うために天龍寺を建て、疎石を開山として招いた。その疎石は尊氏の人

柄について、三つの徳を挙げて称揚している。

第一に、御心強^{おこころづよ}にして、合戦の間、身命を捨給ふべきに望む御事、度々に及^{およ}といへども、笑^{えみ}を含^{ふく}で畏怖の色なし。第二に、慈悲天性にして、人を悪^{たふ}み給事を知りたまはず、多く怨敵を寛有ある事一子のごとし。第三に、御心広大にして物惜^{ものしみ}の気なく、金銀・土石をも平均に思召^{おもしめ}て、武具、御馬以下の物を人々に下給^{くだ}ひしに、財と人とを御覧^みじ合^あはさず、御手に任^{まか}せて受給^{うけ}ひしなり。〔梅松論〕下)

今川貞世(了俊)も「尊氏は弓矢の將軍で、さらに私曲がない」(『難太平記』と褒めている。氣前がよく寛容な性格であつたらしい。但し、晩年になって、長年苦楽を共にした弟の直義を追いつめて死に至らせた内訌(観応の擾乱)に見られる、非情な側面もある。武將にして文人であるこの人には、「寛容と非情」といった対照的な個性が同居している。他にも「動と静」「革新と保守」「俗と聖」「情熱と忍耐」といった多重性がいろいろな場面に現れる。要するに、尊氏の人格はなかなか複雑なのである。

今日、尊氏の情報源として一般受けするのは『太平記』であろう。しかし、この著作は尊氏の半身しか描いていない、と私は思う。政略軍略に長けた、カリスマ性のある武將として馬蹄と征矢と喧騒の中に活躍させはした。しかし、文学と信仰を尊び、人情に厚い側面は書かなかった。そのため、権力志向の強い通俗的な武人に墮^おれている。そのためであろうか、従来からこの人の評価は極端に分かれる傾向がある。例えば、海音寺潮五郎氏と中村正勝氏は対談のなかでこう言っている。(注一)

海音寺「戦前の尊氏に対する評価は、あんまりひどすぎると思いま

歌人足利尊氏について

すが、戦後はまた尊氏を非常に高く買う人が出てきています。私はどっちも賛成できないのですよ。」

中村 「尊氏は逆賊だっていることは少しもまちがいないと思うんです。だから尊氏は嫌いです。逆賊だから大嫌いです。しかし、その一面また人間としていいところがあるのじゃないかしら。」

尊氏の「いいところ」について中村氏は次のように説明している。「尊氏が高氏と書いた時代ですね、その時代から將軍になるまでの書き判をずっとたねんにたどってみたのです。私の研究している古文書学の仲間じゃあ、日本人の書き判の中では、尊氏の書き判がいちばんりっぱだと、だれもが言うほどの立派な書き判を使うのですね。それなどは、やはり尊氏の心の成長じゃないかしらというふうに考えましてね。こういうふうに成長できるのは、彼がよほど世の中を苦しんで渡ってる、のうのうと渡ってはいやしないと、あれこれ思っで非常に苦しんでいるのじゃないかというようなことを考えますとね、尊氏は偉いと思います。」

左方上段の二つが、中村氏の言う、尊氏の花押(書き判)である。その下に両親と弟の直義と、嫡男義詮の花押も併載しておく。

足利高氏花押



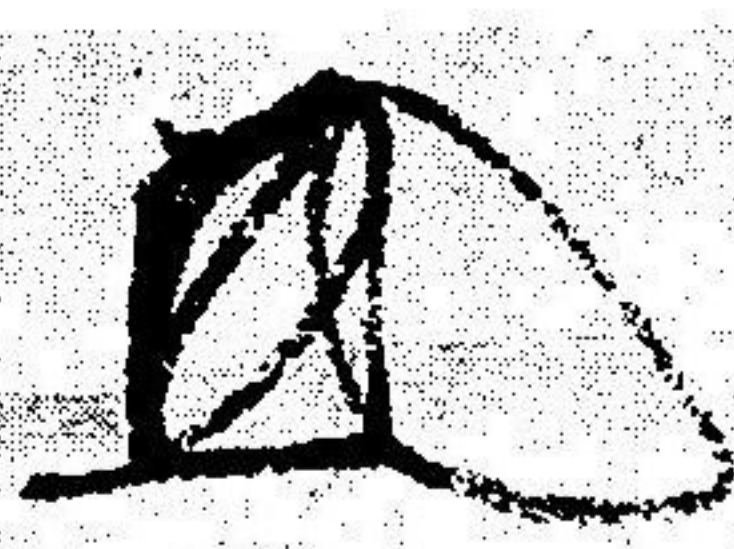
二元徳四年(一三三二)

足利貞氏花押



永仁四年(一二九六)

足利直義花押



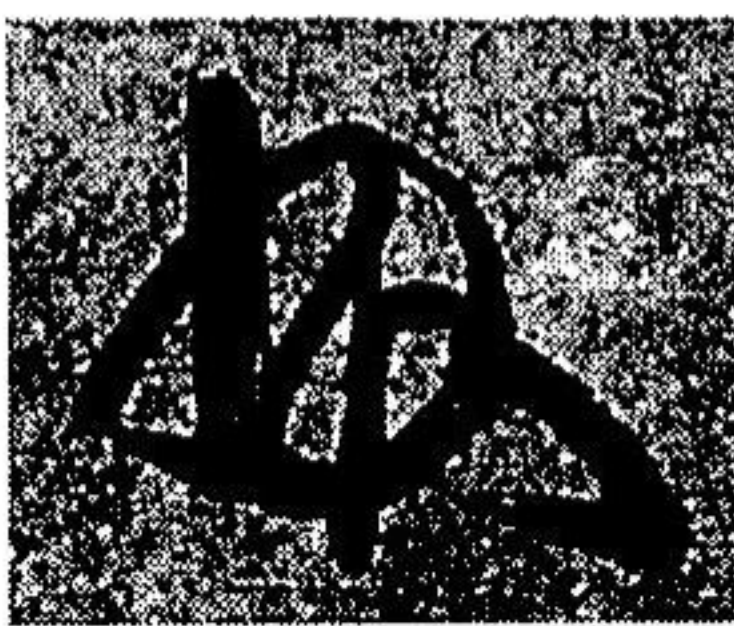
観応元年(一三五〇)

足利尊氏花押



文和元年(一三五二)

上杉清子花押



暦応二年(一三三九)

足利義詮花押



暦応三年(一三五二)

図録『足利氏の歴史』より
(栃木県立博物館 昭和60年)

次に、尊氏の和歌を検討する。本論に入る前に、歌人尊氏の概略を掴んでおきたい。

勅撰集の入集歌は合計八十六首ある。内訳は次のとおり。

- | | | |
|---------|---------|------|
| 第十六勅撰集 | 続後拾遺和歌集 | 一首 |
| 第十七勅撰集 | 風雅和歌集 | 十六首 |
| 第十八勅撰集 | 新千載和歌集 | 二十二首 |
| 第十九勅撰集 | 新拾遺和歌集 | 十七首 |
| 第二十勅撰集 | 新後拾遺和歌集 | 十八首 |
| 第二十一勅撰集 | 新続古今和歌集 | 十二首 |

他の武家の棟梁たちと簡単に比較してみよう。源頼朝の和歌は勅撰集に十首入集した。織田信長は和歌を残さなかったとされる。豊臣秀吉は二十二歳ころから狂歌をつくり、昇進すると正風体を志向して細川幽斎に学び、関白就任後はたびたび歌会を開いて、歌道に熱心であった。徳川家康の和歌は残ってはいるものの道楽の域を出ないとされる。右の四人のなかでは尊氏が抜きん出ている。

武家歌人として名声のある源実朝と比べると、実朝には六六三首を収めた『金塊和歌集』(定家所伝本)があり、現存和歌数は七百六十首ある。勅撰集には九十三首入集している。一方、尊氏には個人の作を集めた私歌集は無く、現存する和歌は、勅撰集に撰入された八十六首の他に「貞和百首」(別名「等持院御百首」)、「延文百首」、私家集の「臨永和歌集」、「松花和歌集」、「藤葉和歌集」、いくつかの法楽和歌、故人の追善法事(通過儀礼和歌)に散在する。他に、連歌の作者として名を連ねており『菟玖波集』に六十七句入集している。

余談になるが「小倉百人一首」の体裁にならって編まれた「武家百人一首」という撰集がある。経基王から足利義澄までの高名な武将百人の詠歌が一首ずつ載っている。『歌学体系』別巻六に収められていて容易に見ることができる。それによると、足利將軍家からは次の十五人が撰ばれている。

義氏、尊氏、直義、基氏、満詮、直冬、義満、義持、義嗣、義教、義政、義規、義尚、義種、義澄

「武家百人一首」は、十二代義晴が將軍になった大永三年(1521)榊原忠次の撰であろうと推定されている。(注二) 足利將軍家の歌が多く採られるのは自然の成り行きであろうが、尊氏の子孫から歌人が多く出たことは事実である。(分家筋の氏族や母方の氏族を加えると

更に増える。)

尊氏は後に話題にするように、若い頃は勅撰集への憧憬の念があった。長じては、歌道師範の二条家を敬い、為定を師と仰いだ。晩年になると、自ら武家執奏により勅撰集の撰集あるべきこと、二条為定を選者とすべきことを光厳天皇に上奏した。「武家執奏」というのは、室町幕府と朝廷の間の連絡の任にあたる、公卿の設けた窓口である。武家が勅撰集を企画して上奏した前例はなく、鎌倉幕府でさえ、公家から示された企画をせいぜい追認する程度であった。尊氏は武家として初めて、その発議権と撰者の指名権を握った。その結果、第十八勅撰集『新千載集』は生まれ、それを先例として、第十九から第二十一代勅撰集までの四つの勅撰集は足利將軍の発議によって編纂された。これは足利幕府が歌壇への支配を強めたことを意味する。そうした流れを創ったのは尊氏であった。

歌人としての尊氏は大きな足跡を残したが、その研究はなぜか少ない。和泉恒三郎氏によると、初めて具体的に作品を挙げて言及したのは『足利市史』上巻(一九二九年)であるという。(注三)その執筆を担当したのは、足利市出身の元文部省図書監修官西村辰次郎氏である。二百五十ページ近くを割いて尊氏を紹介したなかで、和歌に言及したのは五ページにすぎないが、その最後にこう記している。「斯道(歌道)にも堪能にて、其の作頗る多く『歌人尊氏』として優に一家をなすべきなり。」政治と軍事に関する膨大な研究に比べると、歌人尊氏の研究は遅れている。井上宗雄「南北朝時代における歌壇の動向——足利尊氏と二条家との関係を中心として」(『国文学研究』 昭二十六年十二月)こうした本格的な研究は戦後に始まった。

私の管見に入った単行本のうち、まとまった記述のあるものは、高柳光寿『足利尊氏』(春秋社 昭和三十年)、渡辺幹雄『下野の和歌』(下野新聞社 昭和五十八年)、井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』(明治書院 昭和六十二年)がある。論文では、和泉恒三郎「足利尊氏のころ」その和歌をめぐって(吉甲堂 平成三年一月)、渡辺幹雄「足利氏と和歌」(栃木県立博物館 昭和六十年)、井上宗雄「南北朝時代における歌壇の動向 足利尊氏と二条家との関係を中心として」(国文学研究 昭和二十六年十二月)がある。

二 歌人尊氏の誕生まで

尊氏の和歌が勅撰集に初入集したのは二十二歳の年であった。嘉暦元年(1330)に成った『続後拾遺和歌集』に載っている一首がそれである。この勅撰集は後醍醐天皇の宣下を受けた二条為藤・為定によって撰進された。歌の内容から判断すると、尊氏は十代から和歌を詠んでいたらしい。

かき捨つる藻屑なりとも比度は帰らでとまれ和歌の浦波(1084)

「和歌の浦」は紀伊国の歌枕で、和歌の神、玉津姫を祭る玉津島神社がある。後に、歌・歌道の意味でも使われるようになった。一首の意味は「私のこの詠草が、たとえ掻き捨てられる藻屑のようなお粗末なものであっても、今度は返らずに和歌の浦の神(撰者)のもとにとどまってくれよ。」

「比度は帰らでとまれ」とは、おそらく、六年前(1320)の第十五勅撰集『続千載集』の撰に洩れ、作品が返却されて悔しい思いをしたのであろう。その時の撰者は二条為世であった。右の一首は、勅撰集入集の願いを技巧を凝らして婉曲に表明したものであり、その願いはようやく叶ったのである。若い尊氏にとって勅撰集の初入集はうれしかったであろう。

尊氏の一首を採ったのは、為世の孫為定である。後醍醐天皇の妃に姉妹二人が入内しており、自らは東宮時代から近侍していた。大覚寺統の宮廷の歌道師範として重きをなしていた。当時の為定の立場からみれば、尊氏などは足利家の歌道熱心な青年、くらいの認識に留まっていたであろう。

尊氏は、足利貞氏(1273~1331)と上杉清子(?~1342)との間に、嘉元三(1305)年に生まれた。一歳年下に弟の直義がいる。尊氏の和歌の学習がどのように進んだかは明らかでない。ただ、清子は和歌を嗜む人であったことは、『風雅集』に一首入集していることから明らかである。(1601)

上杉家は、鎌倉時代中期に京都の名門、勧修寺流藤原氏の公家から出た重房に始まり、鎌倉に定住して武家の仲間入りをした。重房の娘が足利頼氏に嫁いで、足利家の姻戚になった。清子は重房の孫娘にあ

たり、公家の嗜みとして和歌の教養を身につけたのだろう。清子の兄、重頭も歌を詠み、玉葉集・続千載集に撰ばれ、同じく兄弟の頼成も風雅集の作者であった。清子は筆跡の評価も高く「健筆にして典雅な趣をたたえた書風であり、中世武家女性の範と称すべき教養の高さを物語っている。尊氏の筆跡は、この手筋・素養を継承した」（『足利氏の歴史』109頁）という。教養ある母親から尊氏はいくばくかの教育を受けたのであろう。

尊氏以前に遡って歌人を探すとすると、五代前に義氏（1189～1254）がいる。直接に影響を受けることはなかったとしても、足利家で初めて勅撰集作者となった義氏のことは伝え聞いたであろう。次の一首が『続拾遺和歌集』に載っている。

霰ふる雲のかよひ路風さえて乙女のかざし玉ぞみだるる

この歌の本歌は、僧正遍正の「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめん」である。「霰、玉、みだるる」を縁語にして、霰ふる景を、乙女の髪飾りが玉と砕けるのに見立てて、妖艶な一首にした。『後拾遺集』の撰者は、尊氏と親交のあった二条為世の父、為氏（1222～1286）であった。ただし、この歌が入集したのは義氏在世中ではなく、死後二十余年余りの建治二（1278）年頃である。

義氏は、鎌倉幕府の重鎮であった。源義家の子孫である義康（足利荘官）から数えて三代目にあたる。父親の義兼は頼朝の挙兵に参陣、その功績によって北条時政の娘（頼朝の正室）の妹と結婚した。義氏の正室は、執権北条泰時の次女であり、子の泰氏には北条時氏の女を迎えさせた。『徒然草』の第二百十六段に、北条時頼が鶴岡八幡宮に参拝したついでに、左馬頭入道義氏の屋敷に立ち寄ったときの逸話がある。うち鮑、えび、かいもちいの献立で饗応された時頼は、食後にこう切り出す。「年毎に給はる足利の染物、心もとなく候」義氏はそつなく応じた。「用意し候」と言つて、「色々の染物三十、前にて女房どもに小袖に調ぜさせて」後に時頼に送り届けさせた。この話は、執権との親密な関係や義氏の人柄を髣髴とさせる。

義氏が築いた人脈は、政界だけでなく文化界にも及んだ。例えば、蹴鞠と歌道の名手として著名な、飛鳥井教定（？～1266）と親交を結んだ。教定の父は雅経と言ひ、鎌倉に遷り住むや、蹴鞠を好んだ將軍頼家に重

用された。後に『新古今集』の撰者の一人になった。教定は娘を藤原為氏の側室に送つて、京都の御子左家と姻戚になった。為氏が関東に来たときには教定邸に立寄つたとみられ、教定を介して義氏と為氏は知り合ったのではあるまいか。

為氏は定家の孫にあたり、父は為家、母は宇都宮頼綱の女であった。阿仏尼との間で起つた細川荘の相続争いの裁定を幕府に求めて、たびたび鎌倉にやつて来た。また、母の故郷の宇都宮を訪ね、白河へも足をのばした。宇都宮一族には歌人が多く、京都・鎌倉歌壇と交流もあった。宇都宮一族の詠歌を収めた『新和歌集』の撰定もしくは監修をしたのは、為氏とされている。要するに関東との縁が深い為氏と義氏とが知り合う環境は揃っていた。

義氏作とされる歌は勅撰集に入集した一首のほかにも、もう一首ある。

浮世をばわたらせ川にみそぎして弥陀の生池にすむぞうれしき

この歌は、義氏の開基した法楽寺に残ったもの。「わたらせ」と「すむ」は掛詞。「弥陀の生池」とは、法楽寺の阿弥陀が池のことである。一首の意味は「浮世を渡りきた私の晩年に、故郷の渡良瀬川で禊をして、阿弥陀が池のほとりで心澄まして隠棲できるのはうれしいことだ。」義氏は仁治二年（1241）に出家して法名を正義と称している。足利に法楽寺を創建したのは建長元年（1249）、亡くなったのはその五年後の建長六年であった。

尊氏に話題を戻そう。彼は早くも十代に勅撰集への入集に意欲を示し、二十二歳のときに入集を果たした。尊氏は二条派の平明温雅な歌を学び、やがて二条家に出入りするようになる。両者の関係は、後述するように一時期冷却化するが、やがて復活する。尊氏には二条派との関係を大切にしたい形跡が認められるが、それは尊氏の代から始まったのではなく、おそらく義氏の代あたりからあったものではあるまいか。ただし、それは間接的な環境に他ならず、尊氏の歌の才能を引き出したのはやはり母親清子であろう。

次の歌は、私家集『松花和歌集』、『臨永和歌集』に、足利高氏の名で採録されているものである。いずれの集も、元徳三年（1331）夏頃までに成立しており、数少ない尊氏二十代の作品である。

露にしほれ嵐になれて草枕たびねの床は夢ぞ少なき
あらましに幾度すてていくたびか世には心のまたうつらむ

(松花集)

述懐の心を

これのみや身の思い出となりぬらんをかけそめし和歌の浦風

(臨永集)

三 尊氏の歌風

尊氏が影響を受けたのは二条派の歌風である。それは藤原定家、為家、為氏の系統から分かれた二条為世の作風であり、平淡美を尊重し、洗練された言葉によって、なだらかな調べで詠うのを旨とした。しかし、二条派と対抗していた京極派や冷泉派の作風も大同小異であって、きちんと識別できるわけではない。尊氏の和歌は特定一派から出たというより、王朝和歌の正統的な詠風を手本にしておのずと生まれたもの、とするのが妥当であろう。

入相は檜原の奥に響きそめて霧にこもれる山ぞ暮れゆく

(風雅集664)

霧深い秋の夕暮れ、山のどこから聞こえる、殷殷たる梵鐘の響き、格調の高い端正な歌である。古典和歌によく詠まれた歌材であるが、印象鮮やか。次の歌も、同じような傾向の作品である。

芳野河はやくも暮れてゆく春に花はさかりの岸の山吹

花はみな散りはてにけりいま幾日日数ばかりの春を慕はん

呉林のよをへて秋や近からん葉分の風の音の涼しき

あさひ山はれゆく嶺は明けぬれどなほ霧くらき宇治の川波

冬枯れになりぬる後もならの葉に音を残してふる霰かな

難波がた蘆間のなみは暮れそめて日影かたぶく淡路島山

(延文百首)

尊氏は王朝和歌を追慕する意識が強かった。王朝和歌は、貴族の政治支配の衰えと連動するかのように、伝統尊重主義あるいは尚古主義が濃い。反面、現実から遊離して、典故や技巧を凝らした観念的な作品が多い。その点、尊氏も例外ではない。戦場を駆け巡った経験を実感に詠

んだ作品はないが、その片鱗の垣間見えるような作品はある。いくつか例を挙げよう。

世の中騒がしく待りける頃、みくさ山をとほりて大倉谷といふ所に
て

今むかふ方はあかしの浦ながらまだ明けやらぬ我が思ひかな

(風雅集933)

「あかし」は歌枕の明石と形容詞の明かしを掛けており、「晴れやらぬ」と対比してもいる。この一首は建武二(1336)年冬、山城にて北畠顯家・新田義貞の軍に敗れ、丹波を経由して援軍のいる摂津湊川へ移動中の作。死線を越えた直後とは思えない、淡々とした詠みぶりである。次の歌は、傍らにいつも死があつた過去の回想から生まれたものだろう。

わたりきて身はやすくとも浮橋のあやふきみちをいかが忘れん

山深くところはすみて世のためにまだそむきえぬうき身なりけり

(等持院殿御百首)

どちらも四十歳を過ぎた頃の作品である。二首目は、出家遁世の意志を抱きながら、現実には叶わないジレンマを詠んでいる。「すみ」は住みと澄みの掛詞。「うき」は浮きと憂きの掛詞。尊氏の引退願望は、建武三年、三十一歳のときに清水寺に奉納した自筆願文に表れている。「この世は夢のことくに候。尊氏にたう心たばせ給候て後世たすけさせたをしまし候へく猶猶とんせいしたく候(下略)」
次の歌も遁世の志を秘め、前の歌と似たような迷いを詠んでいる。

あづま路はふるさとながら武蔵野の遠きに末を猶や迷はん

(等持院殿御百首)

尊氏は権力者の階段を上る一方で、内面をよく見つめ、迷い心も率直に歌にした。それは、歌人として大切な資質である。高柳光寿氏は次のように評している。「権力に、名誉に、金銭に、他との争ひに、よく勝ち、よく望を達する人々でも、自己を見つめることのできない人々が多い。そこへ行くと尊氏は自己を知り得ないまでも、自己を知らうと恐らくは努めたであらう。さういふ男であつたといはれ得るやうに思ふ。」
冷静な観察から生まれた歌もある。

よしあしと人をば言ひて誰もみなわが心をや知らぬなるらん

誰もみな老となるべき年波の行く方も知らず何いそぐらん

(等持院殿御百首)

次の二首は、詩経の六義に照らせば「賀」に担当する。一首目は、和歌(しきしまの道)の讃歌、二首目は、皇国の讃歌で、いずれも歌柄が大きい。

何事も思はぬ中にしきしまの道ぞこの世ののぞみなりける

あきらけく岩戸を出でし朝より天照る神の国ぞ栄ゆる

(等持院殿御百首)

尊氏は、雅やかで端正な韻律にのせた正統派の和歌を詠んだ。育ちのよさを反映するような、大らかな詠風の歌もあり、険難な過去が投影したような歌もあり、冷静沈着な歌、観察のきいた歌、内面を見つめた歌、率直な感懷を述べた歌など、幅広さを感じさせる。南北朝前半期の代表的な歌人に連なるべき人である。

四 尊氏の法楽和歌について

尊氏は信仰心が篤かった。先学の研究によると、観音信仰の持主であると同時に、地藏信仰や臨済禅を尊んだ。また真言僧三宝院賢後や天台僧の法勝寺恵鎮と親交があり「宗旨には少しもこだわらぬ大揚な心境がうかがえる。こだわらないで、諸社諸寺にいろいろの祈祷をさせている。」(高柳光寿『足利尊氏』)という。

尊氏はしばしば法楽和歌という、神仏の前に集団献歌する儀式を主宰した。親しい武家や公家に呼びかけて歌を募り、それらを神仏に奉納して仏神の加護を祈った。和歌の好尚と信仰心が結びついた儀式と言える。具体例を挙げると、建武三年五月、九州から上洛の途中、備後の浄土寺において観音経の偈を題として七首の和歌を奉納した。その他、次のような法楽和歌に参加している。

住吉社奉楽和歌

(建武三年九月、尊氏の勧進により十九名出詠、奉納)

北野社百首和歌

(建武三年冬、尊氏の勧進により十一名出詠、奉納)

春日社頭公武和歌

(暦応二年十二月、尊氏の勧進により十二名出詠、奉納)

金剛三昧院奉納歌

(康永三年十月、直義の勧進により二十七名出詠、奉納)

松尾社法楽和歌

(観応二年八月、尊氏の勧進により十一名出詠、奉納)

経旨和歌

(文和四年十一月、永興禅師の尽力により百人出詠、奉納)

「法楽」はもともと仏教用語であり、仏前で読経や修法をして法悦にひたることであった。平安時代の末期に、仏・菩薩の垂述たる、わが国の神明は、和歌をこそ法楽したまう、という思想が現れ、読経や修法に代えて、自詠の和歌を奉納して、もってその加護を祈った。古くは相模が箱根権限に奉納した百首歌があるが、法楽和歌の概念が確立して、意識的に実行されるのは、慈円や西行の時代からである。西行(1118-1189)は晩年に「自歌合」を伊勢神宮に奉納した。「自歌合」というのは、自分の歌を左右に番えて歌合にしたもの。自ら詠みためた一四四首を選んで、正と続の三十六番歌合を編んだ。正編は「御裳濯川歌合」(1187)と一般に呼ばれており、続編は「宮河歌合」(1188)と呼ばれている。判者として、前者は藤原俊成、後者は藤原定家に依頼した。尊氏が、神仏へ和歌を奉納するスタイルは、西行の場合と異なり、同志に呼びかけて詠歌を募り、墨書して奉納した。経文を添えることもあり、寺社への信仰の色彩が濃く出ている。また、集団献歌をすることにより、同志の結束を固める意図もあったとみられる。その一例として、建武三年九月十三日の「住吉社法楽和歌」について、簡単に紹介したい。

「住吉神社」は海上神護の神として漁業者や航海業者に信仰されたことから各地に建てられたが、法楽歌を奉納したのは、摂津一の宮の住吉神社であろう。神功皇后の外征に偉功があったことから、従軍神とも称されて武家にも尊崇された。いつの頃からか定かでないが、住吉神は和歌の神として仰がれ、紀伊の和歌浦の玉津島明神とともに、歌人らに崇拜された。

法楽歌の奉納が行われた時期は、湊川合戦が終ってから三ヶ月に満たず、北朝の光明天皇の擁立から一ヶ月を経た頃、南朝方とは京都周辺での戦闘が続いていた。尊氏のことであるから、戦死者の霊を弔う気持ちもあったかもしれない。

内容は三部で構成されている。第一部は、尊氏以下十九名の九四首(各人五首、一名のみ四首)、第二部は「大乘妙法蓮華経 宝掌菩薩略讚

「偈」の写経、第三部は、尊氏以下十一名による三十二首の書写。参加者のうち、特に注目されるのは、公家の冷泉為秀（?～1372）である。当時の和歌師範の御三家の一つであった。公家からもう一人、日野資明（1297～1353）が参加した。尊氏が九州へ敗走するときに、院宣の発布を依頼した人物で、尊氏の信頼が厚かった。

時節柄、晩秋を詠んだ歌が多いが、そのなかに、天下平穩の祈りを籠めた作品がいくつかある。

参議徒二位行源朝臣尊氏

玉垣も光添ふらしくもりなき御代には月もすみよしの浦

参議正三位藤原朝臣資明

祈りこし君につかへて住吉の世よしと照らす秋の月かけ

左馬頭源直義

いにしへのかしこき御代にたちかへるこの秋やなほすみの江の月

侍従為秀

くもりなき世のしるしとや長月の月も名高きかけを添ふらん

尊氏の主宰した「住吉社法楽和歌」の催しには十九名の和歌が集まった。入洛して間もない上に、南北朝の争乱の最中であつたことを勘案すれば、尊氏の威勢の大きさが想像できる。さらに、和歌と信仰の両面にみなみならぬ意欲を感じさせる。ただ、住吉神社に和歌と共に仏教經文を奉納していることは、神仏習合の結果であるにせよ、尊氏のおおらかな信仰態度が反映しているのかもしれない。

集団詠歌の奉納の意義を考えると、内輪の儀礼として、密接な人間関係を築くのに一定の役割をはたしたのであろう。尊氏の法楽和歌は、その信仰心の強さと和歌の好尚とが情熱的に結合したものであり、尊氏の個性がよく反映している。

五 尊氏と二条家との関係について

前節では尊氏が法楽和歌を主宰したことを述べた。それは、武将にして歌人である彼の実力が、歌人を束ねる求心力として現れたものである。本節では、晩年の尊氏の発言力が歌壇を動かした事実を示す。すなわち、延文元年（1356）六月八日、「武家執奏」によって勅撰集の撰集を發議し、二条為定を撰者にすべきことを後光厳天皇に上奏した。勅撰集の發議は

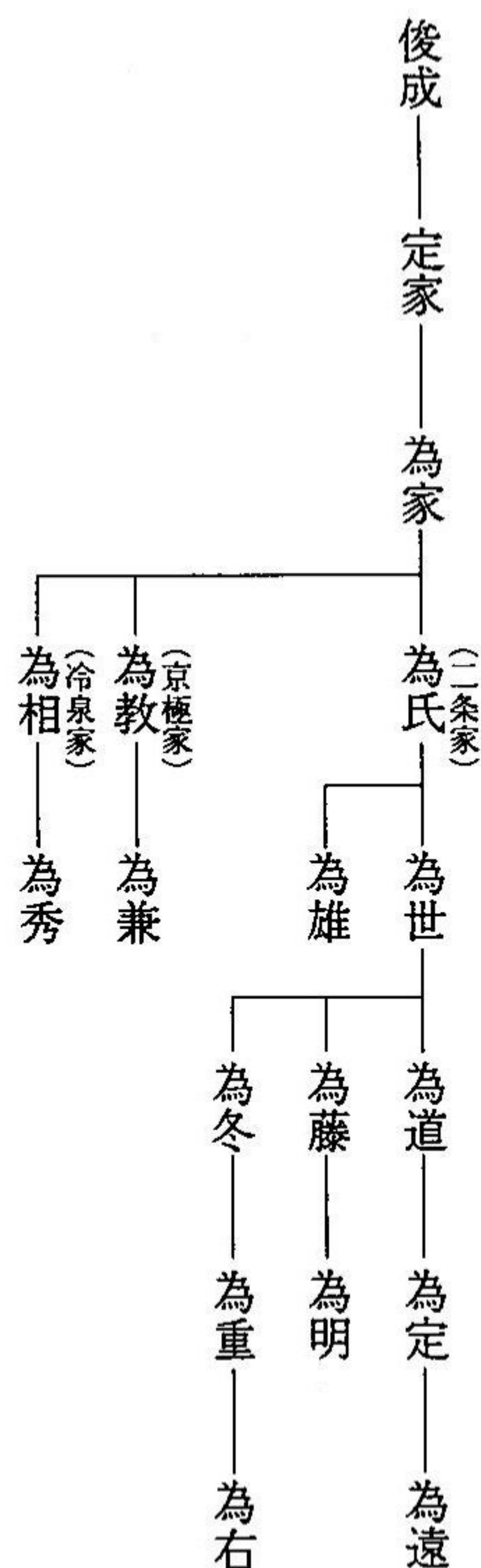
『古今和歌集』以来、三百年以上の長きにわたって、公家に委ねられていたが、尊氏は初めてその慣例を変えたのである。その提案から三日後に、天皇の綸旨が出て、為定による撰進作業が始まった。しかし、尊氏はその完成を見ることはなく、背中にできた悪性の腫瘍が命取りになつて、一年十ヵ月後に五十四歳の一期を終えた。撰進作業は続けられ、延文三年十二月、第十八勅撰集『新千載集』として完成した。

尊氏が歌壇に発言力を強めたことは、公家の文化的地位が相対的に後退したことを意味する。なぜ、そうなったのか。尊氏と二条家との関係を半世紀ほどの時間の流れの中で考えてみたい。

尊氏の生まれた十四世紀初めの頃、和歌はいまだ第一芸術の地位にあつた。しかし、京都歌壇の指導的な立場にあつた御子左家（藤原俊成、定家、為家の家系）には内紛が続いていた。為家の子孫の代になると、二条家（為氏系統）、京極家（為教系統）、冷泉家（為相系統）に分裂して、互いに正当な後継者であることを主張したためである。その帰趨にそれぞれ家の浮沈がかかっていたので、政治力を頼みとして権力との結びつきを強めた。二条家は太皇統（南朝）の歌道師範となり、為世は女を後宮に入れた。京極家は持明院統の歌道師範となり、冷泉家は京極家寄りのスタンスをとった。

歌道家が最も栄誉としたのは、勅撰集の撰者を委託されることであつた。勅撰集は天皇の綸旨か上皇（法皇）の院宣に始まる国家的な文化事業であり、撰集作業は最も力量のある歌道家に任されたからである。両統迭立後は、持明院統が勅撰集を企画すると京極家から撰者が立ち、太皇統が勅撰集を企画すると二条家から撰者が出た。尊氏の和歌が『続拾遺集』に初入集したのは、後醍醐天皇（太皇統）に近い二条為藤・為定が撰者をつとめたときである。

【御子左家系図】



尊氏が建武中興の立役者となり、大覚寺統を支えていた時期には二条家と親密な関係にあった。『新千載集』にこんな逸話と贈答歌がある。ある晩、尊氏（等持院贈左大臣）が二条為世邸を訪れ、為世には会わずに月見をして帰ったことがあった。翌朝、尊氏の訪問を知った為世は、花の枝に一首を結んで贈った。

夜半に見し人を誰ともしらせねば軒端の花を今朝ぞうらむる

返し

しられじと思ひてとひし夜半なれば軒端の花のとがやなからん

(1715)

尊氏が建武政権を離脱して後醍醐天皇の対抗勢力になると、関係は一気に冷却化した。その象徴的な出来事は、二条の為冬（為世の長子）が、尊良親王の率いる尊氏討伐軍に参加したことである。為冬は建武二年（1335）十二月十二日、駿河の佐野で戦死した。『梅松論』は次のように記している。

「二条中将為冬を始めとして京方の大勢討たれぬ。此の為冬朝臣は將軍の御朋友なりしかば、彼の頭を召しよせ、御覽有りて御愁傷の色深かりき。」

「為冬朝臣は將軍の御朋友」とは、尊氏はかつて二条家に出入りし、為冬とは和歌の遊びを共にして、親密であったことを指すのであろう。かつての歌友に弓矢を引かれた尊氏は、大覚寺統を擁護する為冬、あるいはその背後の二条家の敵意に強い衝撃を受けたものと思う。

動乱後の情勢は当然、二条家にとって厳しく作用した。後醍醐帝が吉野へ都を移し、南北朝分裂が確定し、やがて帝が崩御すると、二条家の類勢は明白となる。為世は、そういった状況下で暦応元年（1338）八月、世を去った。家督を継いだ孫の為定は、逆境に立たされたが、したたかにお家再興をはかった。従来からの経緯を尊重すれば、南北朝に従って吉野入りすべきところであるが、京都に残った。北朝ではライバルの京極派が歌道師範をつとめており、尊氏には冷泉為秀が近侍することが多くなっていた。京都における二条派は一時期沈淪した。しかし、二条家には、為世の代に築かれた幅広い人脈があり、それが二条家の復活を側面から支援したらしい。井上宗雄氏は当時の花壇の動きについて次のように指摘している。

「二条家は、恐らく一族一門結束して新権力者尊氏兄弟に接近すべく

努力したのではあるまいか。頼阿は早く尊氏家の会に出席し、慶運も同様、兼好も師直の家に出入している。また金剛三昧院奉納和歌には著名な二条派歌僧が多く加わっている。恐らく二条家の、足利氏の接近には、これら歌僧の努力が与って力あったのであろう。」（『中世歌壇史の研究』四二二頁）

康永末（1350）になると、尊氏と二条為定は円満な関係に復帰した。それを具体的に示しているのが、貞和元年（1355）冬、尊氏が為定より三代集（古今、後撰、拾遺の三勅撰集）の伝授を受けて、師弟の契りを結んだことである。征夷大將軍尊氏が、たとえ形式的であるにせよ為定の弟子となったことは、ものごとくに拘泥しない謙虚な内面の表れであろうか、あるいは、何か計算があったのだろうか。井上氏は「尊氏は康永に入っては二条家の人々に勿論悪意を抱かず、またその接近に対しても四囲を顧慮する必要がなくなったのであろうと推察される。」（前掲書）と記している。

観応元年（1350）八月、二条為世の十三回忌にあたり、為定は追善和歌を勧進した。尊氏も詠進して、故人を追憶している。

蘆牆のまぢかき道を知らぬまは仮なる宿に迷ひけるかな
年へにし和歌のうらわの友千鳥あとを慕へば音こそ鳴かるれ

為世の十三回忌の前後、すなわち貞和四年から観応二年にかけては、武家にとって多難な時期であった。尊氏の執事、高師直と足利直義（尊氏の弟）との不和に端を発して、いわゆる観応の擾乱が起った。高師直の敗死、尊氏の支持勢力と直義の支持勢力の合戦が続き、これに南北朝勢力がからんで、世情騒然となった。その最中に詠んだ尊氏の和歌がある。

おさまれとわたくしもなく祈るわが心を神もさぞまもるらん

（松尾社法楽和歌）

観応の擾乱は、直義の死によってひとまず収束する。その間に南朝方は北朝の三院、光厳・光明・崇光院を京都から連れ去った。ために北朝は天皇空位の異常事態となった。その余波は歌壇にも及び、北朝に代々近侍して歌道師範をつとめた京極家とその支持勢力は消滅の憂き目をみた。足利義詮の尽力により、北朝は後光厳天皇が皇位を継い

だ。歌道師範のいなくなった北朝に、唯一その任を勤めうるのは二条家以外に無かった。持明院統の二条家支持への転向は自然の成り行きであった。尊氏の二条家支持も隠然たる影響を及ぼしたであろう。

延文元（1356）年六月、尊氏は後光厳天皇に対して、武家執奏により勅撰集の撰集あるべきこと、撰者は二条為定とすべきことを上奏した。為定にとって、一世一代の名誉であったのは言うまでもない。

六 むすび

尊氏は十代から和歌を作り、勅撰集への関心はそのころから強いものがあつた。戦乱のうち続く時期においても、歌心の涸れることはなかった。時々、側近の歌人を集めて歌会を開き、「武」だけではなく「文」においても求心力を有していた。晩年になってその政治力を背景にして、勅撰集の撰進事業を上奏して実現させた。伝統と権威を重んじる中世歌壇に、武家の意志を反映させたのである。

【注と参考文献】

- 注一 海音寺潮五郎『日本史探訪』第三集 昭和四十七年 角川書店
 注二 伊藤嘉夫「武家百人一首と其の類列の百人一首」跡見学園短期大学紀要七・八集、昭和四十六年三月
 注三 和泉恒三郎「足利尊氏のころ」その和歌をめぐって 吉甲堂 平成三年一月

○ 付記

本校の村尾元忠教授には、政治家としての尊氏について御教示を賜った。また、次の著作にも恩恵を受けた。

- 高柳光寿『足利尊氏』（春秋社 昭和三十年）
 渡辺幹雄『下野の和歌』（下野新聞社 昭和五十八年）
 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』（明治書院 昭和六十二年）
 渡辺幹雄「足利氏と和歌」（栃木県立博物館 昭和六十年）

【受理年月日 二〇〇二年九月三十日】

